

# ディケンズの作品におけるイジメの問題

## Bullying in the Works of Dickens

松岡 光治

Mitsuharu MATSUOKA



「超国家主義の論理と心理」(1946)の中で丸山眞男は、価値と規範の体系が天皇 — 精神的権威と政治的権力の専有者で究極的価値たる天皇 — への相対的な近接の意識に基づいて成立していた戦時下の日本では、自分に対する主体的な責任がないために、上から受けた抑圧を下へ譲り渡すことによって精神の均衡が保たれていたと述べている。国と時代は異なるが、このような「抑圧の移譲による精神的均衡の保持」<sup>1</sup>は、女王を頂点としたピラミッド型社会の厳格な階級制度と家父長制度に支配され、ラマルクやダーウインの自然淘汰による進化学説によって社会制度としてのキリスト教の基盤が脆弱化していたヴィクトリア朝でも、強者による弱者への様々な形のイジメを通して現れている。ヴィクトリア朝の作家の中でイジメの場面をもっとも数多く、もっとも興味深く描いたのは恐らくディケンズであろう。以下、彼の作品に焦点を絞ってイジメの問題を考察してみたい。

### 1 階級的なイジメ

クリークル校長の無知と鞭に象徴されるセイレム・ハウスでは、校長が病気で家に引きこもった日に、さながら「千頭もの犬からイジメを受ける牛か熊のように」(DC, 7), メル先生が生徒たちの喧騒に悩まされる。このイジメを彼らにけしかけたのは、校長でさえ手出しする勇気がない富裕階級の息子、スティアフォースである。陸軍士官学校で先輩から13分の逆さ吊りという焼きを入れられたバグストック少佐は、イジメに耐え忍ぶことを「タフ」と「ズル」の美学に昇華した奇骨のある御仁だが、そんな少佐でさえ虚弱な息子をパブリック・スクールにやる決心がつかないドンビー氏に理解を示している (DS, 10)。つまり、どんな種類の学校であれ、イジメの実情については大同小異だったのである。ましてや、全寮制の寄宿学校では必然的に心理的距離が狭められるので、弱者はボス（ひと昔の言葉を使えば、番長）とその腰巾着たちへの隷従を強いられる傾向が強い。当時のパブ

リック・スクールには下級生が上級生の雑用をする暗黙の制度 (fagging) があって、それがイジメの温床となっていた。パブリック・スクールを戯画化した低級な寄宿学校、セイラム・ハウスにも類似した内規がある。7シリングを献上できるデイヴィッドはステアフォースの庇護を受け、いつも校長に鞭で打たれているトラドルズは、メル先生のために泣いたという理由で彼のイジメを受ける。聖職者養成を目的とした中世のグラマー・スクールから発展したパブリック・スクールでは、18世紀後半になると自分の屋敷で教育を受けていた貴族階級の子弟が増え始め、その結果として暴力、飲酒、喫煙、賭博などの横行でモラルが低下するようになった。理由の一つとしては、そうした子弟たちが紳士階級でもない教師の権威を歯牙にもかけず、我が物顔に振舞っていたことが挙げられる。<sup>2</sup> 下級生たちを煽動してメル先生をいびらせたステアフォースが、卑怯者と非難された時に、私設救貧院 (alms-house) にいる先生の母親に言及して口答えをした (挿絵参照)



背景にも、そうした階級意識を反映した事情がありそうだ。

ディケンズは、大いなる遺産相続の見込みによって一躍お大尽になったピップの金力に対し、「弱者イジメのパンブルチュック (bullying old Pumblechook)」(GE, 9) が媚へつらう時の豹変ぶりを通して、自己保存のために強大なものに従う〈事大主義〉という人間の本能を喜劇的に描いている。にわか成金のピップと青猪亭で暖炉を背にして押し合っているとき、ドラムルは何気なく沼沢地や鍛冶屋に言及している (43)。これは成り上がりの青年紳士に対する「准男爵の次の次の世継ぎ」(23) による意図的なイジメである。また、父親が醸造業で財をなした中産階級のミス・ハヴィンシャムの養女、エステラはピップを「働いている下品な子」(8) と呼んで軽蔑しているが、この階級的なイジメに対しては、彼女が(貴族ではないものの)階級が上のドラムルと結婚し、ドメスティック・ヴァイオレンスを受けることで仕返しをなされる。その意味で、ピップにとってはドラムルもまた、実姉の虐待に対して代理で復讐してくれたオーリックと同じように、自分の分身なのである。

訴訟依頼のない怠惰な法廷弁護士レイバーンは、三角関係による嫉妬に駆られて自分を追跡してくるヘッドストーンに対し、逆に彼をロンドン中さんざん引き回して楽しんでいる

(OMF, 3: 10). この真綿で首を締めるようなイジメは、世紀末の退廃的な紳士の先駆けとなる男にとって、セルフメイド・マンの学校教師に対する単なる退屈しのぎにすぎないのだろうか。これは、レイバーンが厳格な父権社会の中で結婚問題を除いて人生のほとんどを M. R. F. (我が尊敬せし父上) に牛耳られている点を考えると、退嬰的な紳士が世代的なイジメを階級的なイジメへ無意識的にすり替えた抑圧の移譲のように思えてならない。

以上の3つの例は個人の個人に対する階級的なイジメである。逆説めいた言い方をすれば、ディケンズが歴史小説で描いた階級の階級に対するイジメもまた個人的レベルで考える必要がある。フランスの旧制度において、特権階級が第三身分の平民に極貧の生活を強いた行為は、確かに集団的なイジメだと言える。貴族に対する平民の階級闘争となったフランス革命では、カトリックの聖職者が特権階級に属していたためにキリスト教も弾圧され、「目には目を」の法理を超えた何倍(時には何十倍)もの報復がなされた。「飢えた連中は草を食べばよい」(TTC, 2: 22)と言った財務長官フーロンが、サン・タントアヌの民衆から口に草を詰め込まただけでなく、リンチに加えて街灯を利用した絞首刑までも受ける(挿絵参照)のは、その典型例だと言える。フランス革命のような



〈下克上〉では、それまで潜在化していた恨みや悪意が解き放たれ、個人の責任が集団の中に埋没されて消滅してしまう。実際に『二都物語』では、民衆のすべてが「自由、平等、博愛」をスローガンとして掲げていたわけではなく、多くは迫害を受けた返報として貴族を処刑していたように描写されている。この小説におけるフランス革命が、革命を体現するドファルジュ夫人の長年の宿怨を晴らすための個人的な報復行為の様相を帯びて見えるのは、そのためである。『バーナビー・ラッジ』でも、娘を見つめた罰として親方からイジメを受けた徒弟(BR, 8)が、のちにタパーティット隊長の副官となり、カトリックに対するプロテスタントの集団的なイジメと言えるゴードン騒乱で暴れている。革命や暴動は、上を下への馬鹿騒ぎの中で狼藉を働いた責任を藁人形に転嫁して最後に火刑に処した昔のカーニヴァルのように、加担者の多くにとっては個人的な意趣返しや犯罪行為が不問に付される恰好の憂さ晴らしの場なのである。

同じ集団的なイジメであっても暴力を伴わない場合もある。それは弱い立場の個人に対する集団の〈シカト〉という（日本の学校ではお馴染みの）陰湿なイジメである。労働組合に入るのを拒んだブラックプールは、煽動者スラックブリッジの口車に乗った仲間の労働者たちから村八分オストランズムというイジメを受ける。ブラックプールは「これから先、追い詰められたって、見放されたって、シカトされたって不服はねえ」（HT, 2: 4）と言うが、それは彼が貧乏ゆえに酒びたりの妻と離婚できず、彼女が死んでレイチェルと一緒にいるまでは、組合に加入せずレに働き続けなければならないからであろう。特定の非組合員が組合員たちに爪弾きされるのはもちろん階級的なイジメではない。しかし、このような泥沼状態（muddle）にブラックプールを陥らせた張本人は、労働者たちを「計算の数字や機械」（2: 5）のようにしか考えない工場主バウンダビーである。それゆえ、これはやはりプロレタリアートに対するブルジョアジーの階級的なイジメだと言わねばならない。貧者を救うために訪れた紳士たちの寄付の依頼に目もくれないスクールジのように、バウンダビーは貧乏なブラックプールが離婚の相談を持ちかけても横を向いてしまう。バウンダビーは、個人の自由な利益追求活動に対する干渉を排除する自由放任主義レッセ・フェールの信奉者であるだけで

なく、その主義を悪用して労働者たちの貧困や苦悩に対する放置までも正当化しているように思える。労働者たちの貧苦に対する資本家の無視という階級的なイジメの問題を解決するためにディケンズが唱道したのは、近代的な階級制度の中でとかく忘れられがちな父親的温情主義バターナリズム、カザミアンの言葉を借りれば「キリスト教的干渉主義（Christian interventionism）」<sup>3</sup>である。ここで確実に言えるのは、いかなる階級のイジメであれ、強者の側に〈想像力〉が枯渇しているかぎり、社会的弱者の悲惨な状況に介入することも、その心中を理解することもできず、問題は永久に解決されないということだ。ディケンズは抑圧の移譲がはびこる社会で芸術や娯楽の価値を訴え続けたが、その理由は想像力に内在する無限の可能性にあったのである。<sup>4</sup>

## 2 なぐるか、ひるむか

日本の古きよき時代における学校での生徒のイジメは、先生の権威が絶大だったこともあってか、その陰湿さや執拗さは今ほどではなく、なんとか我慢できたような気がする。同じ高温でも多湿の東アジアよりは乾燥したアメリカ西海岸の方が我慢しやすいのと同じ論理であろうか。カラッとした許容範囲のイジメであれば、ほほえましく思える情景がディケンズ文学の中にも幾つか見られ

る。例えば、無商旅人は学校時代に実家から祝いの詰め籠が送られてくる自分の誕生日の数日前に、「目覚めた良心をなだめる正義の行為として、懲罰のために証人の前で瘤を作ってもらいたいと言ったイジメっ子のグロブソン」(UT, 20)の気高い行為を懐かしく思い出している。『クリスマス・ストーリーズ』の「学校生徒の物語」では、チーズマン爺さんと呼ばれる生徒が副教員になったせいで裏切り者としてイジメに遭うが、そのために彼が遺産を相続して姿を消した時も自殺の噂が流れる。しかし、チーズマン先生は遺産相続後も学校と良好な関係を持ち続け、過去のイジメを水に流して生徒たちに大盤ぶるまいをしてくれる。

このような生徒同士のイジメはともかく、教師の生徒に対するイジメは(特に、その教師が無知蒙昧な独裁者の場合は)、ディケンズの微笑が憤怒の形相に変わる。スクウィアーズの学校に付けられた名前(Dotheboys Hall)以上に、教師の生徒に対する暴力的なイジメを鮮明にイメージさせるものはない。田辺洋子氏の訳によれば「ショーネンジゴク学院」<sup>5</sup>だが、スクウィアーズが手当たり次第に生徒を鞭打っている(NN, 8)ので、「聖トベンダ学園」という訳でもよいだろう。一方、「制御できない欲望を満たすにも似た少年に対する鞭打ち」(DC, 7)に快楽を見出すセイレム・ハウス—こちらは魔女狩

りを連想させるので「聖トガリ学院」—のクリークル校長の嗜虐的傾向は、その声が部下のタンゲイを拡声器として使わねばならないほど小さいので、むしろ大声のスクウィアーズの場合よりも無気味で恐ろしい。

スクウィアーズにとってイジメの道具である鞭は「力、優越、勝利」<sup>6</sup>の象徴である。また、鞭はファリック・シンボルであるから、ニコラスがスクウィアーズを打ちのめすために鞭を奪い取ったこと(挿絵参照)は、後者が去勢されて臆病者になる(正確には、臆病者に戻る)ことを意味する。「頑丈で、太い手」のガージャリー夫人がピップを「手塩にかけて」育てるために使う「くすぐり棒(Tickler)」(GE, 2)もまた、先っぽを蠟で固めた懲罰用の鞭である。ドメスティック・ヴァイオレンスが男女逆転の形で横行する村の鍛冶屋では、ガージャリー夫人の鞭はもちろん夫のジョーを去勢して奪い取った〈男



根)の象徴だ。一方、リテラシーが欠如した無知なジョーにとって、彼が話をする時に握る暖炉の「火かき棒」(12)は、音声に意味を与えるロゴスだと言えよう。しかし、彼に反抗の兆候が少しでも見えると、たちまちガーサリー夫人は彼に飛びかかり、火かき棒を奪い取って隠してしまう。この棒が何のシンボルかは瞭然として明かだ。このような彼女のイジメはクリーク校長と同じ加虐性愛の要素に満ちている。彼女がオーリックの暴行後に彼に対して従順な態度を見せたことについては、サディズムとマゾヒズムは表裏一体をなすという意見がある。<sup>7</sup>しかし、彼女の仕草には「厳しい先生に対する子供の態度に浸透しているような、卑下して相手の機嫌を取るような態度」(16)が見られたと語り手ピップは述べている。そうであれば、エステラとドラムルの結婚生活に関する弁護士ジャガーズの意見に従い、すべての人間関係は「なぐるか、ひるむか (either beats or cringes)」(48)と考えるべきだろう。

弁護士について言えば、ピクウィック対バーデルの結婚不履行事件を担当したドッドソンとフォッグをはじめ、ディケンズが描く一連の弁護士には、活殺自在の権を握っている依頼人たちを恫喝し、金を巻き上げる (PP, 20) という共通点がある。刑事専門のジャガーズは「ウェミックに金を返させるぞ」(GE, 20) と言っ



て依頼人たちを威嚇している (挿絵参照) が、彼のイジメの対象は人間だけではない。昼食にサンドイッチを食べる時も、それは「サンドイッチそのものに対するイジメ」のようにピップには見える。『大いなる遺産』は「手」のイメージが支配的な小説であるが、イジメの問題も同じイメージによって提示される。持ち前の演技力によって村の居酒屋を支配していたウォプスルを「弱者イジメのような反対尋問形式で」(18) 顔色なからしめる時も、「弱者イジメをするような、うさん臭そうな態度で」ピップの徒弟契約をジョーから解除してやる時も、ジャガーズは人差し指を相手に投げかける。殺人を犯した家政婦モリーの強靱な手首を押さえつけるジャガーズの人差し指 (26) は、相手に対する支配力の象徴である。そのようなジャガーズも、権力と金力に屈服しないジョーから「お前さんがオレを牛か熊みてえにイジメに来たんじゃったら、かかって来やがれ！」(18) と威喝されて、尻込みしてしまう。「なぐるか、ひるむか」

というジャガーズの直截簡明な人間観が説得力を持っているのは、このように彼自身が自分の行動で実証しているからである。

慈善学校に通ったクレイポールにとって、救貧院育ちのオリヴァーの髪を引っ張ったり、耳をつねったりするイジメは、空腹のせいで立腹している時の腹いせとなる無邪気な遊びにすぎない。そうした肉体的なイジメは教区吏のバンブルに鍛えられたオリヴァーには我慢の許容範囲だが、母親の悪口という精神的なイジメは彼の堪忍袋の緒を切ってしまう。オリヴァーがクレイポールを床の上に殴り倒し、「今や彼の足元に這いつくばった臆病な弱い者イジメ」(OT, 6)を見下ろしている姿から言えるのは、彼は決して蒲柳の質に生まれたわけではなく、実は心身ともに強健な少年だということだ。確かにオリヴァーは主人公としてデイヴィッドやピップのような奥行きの深さに欠けるが、それは彼がイジメ、暴力、犯罪にあふれた小説で悪の諸相を際立たせる〈触媒〉の役割しか与えられていないからではなかろうか。「なぐるか、ひるむか」の人間関係は、オリヴァーとクレイポールの例で明らかかなように、ディケンズの勸善懲悪の思想に従って反転することが多い。彼の信念によれば、弱い者イジメとは自分の臆病さを隠蔽するために虚勢を張って相手を脅すことなのである。

### 3 臆病者の弱い者イジメ

ディケンズの作品における弱い者イジメの横綱として真っ先に思い浮かぶのはバンブルであろう。だが、その露払いとして『ボズのスケッチ集』には「気むずかしく、獣のようで、怒りっぽい、目下の者に威張り散らし、目上の者にへいこらす小粒な暴君の立派な見本」(SB, “Our Parish” 1)として、一人の救貧院長が登場する。この露払いが「教区吏の威光と権威に嫉妬している」点から判断すると、教区吏のバンブルが救貧院の婦長だったコーニー夫人と結婚して救貧院長になったということは、地位の格下げを意味する。従って、結婚後のバンブルが救貧院の連中の前で女房に打擲ちようちやくされて面目を失い、「堂々たる教区吏の高みから完全に尻に敷かれた恐妻亭主のどん底へ転落してしまった」(OT, 36)のも、当然の報いだと言わねばなるまい。

バンブルの場合、その役職の権威を高めているのは彼自身の威張り散らし(すなわち脅し)で、これがディケンズの作品で数多く描かれる弱い者イジメの最大の特徴となっている。しかし、ほとんどの弱い者イジメには、“A bully is always a coward.”という英語の諺が当てはまる。これはエッジワースの『オーモンド』(1817)の第24章でマクルール夫人について最初に言及された諺だが、デ

イクエンズがバンプルについて「彼は弱者イジメが大好きで、ちょっとした残虐行為をして途方もなく楽しんでいたので、(言うまでもなく)臆病者だった」(OT, 36)と書いたことで、人口に膾炙するようになったのではあるまいか。

ディケンズの作品における多くのイジメの実例から帰納して言えば、弱者イジメをする目的は個人的な利益(特に金もうけ)であり、その際に一番必要となるのは威張り散らすための大声である。ニューヨーク港に上陸したマーティンが、ダイヴァー大佐に紹介されたポーキンス少佐の下宿屋で確信したことは、金もうけ第一主義のアメリカ人にとって、「もっとも大きな声で怒鳴り立て、もっとも礼儀を顧慮しない人物が最高の愛国者」であり、「直接的な個人攻撃で怒鳴りつけ、威張り散らし、相手を脅すのが愛国的行為だ」(MC, 16)という点であった。しかし、アメリカ人の多くがイギリス人と同一恫喝するように大きな声で自分の意見を一方的にしゃべり、相手に話をさせない—アングロ・サクソン人の末裔であることを考えれば、マーティン青年のアメリカ人に対する蔑視的な印象(ということはディケンズの印象)は、目糞が鼻糞を笑う類と言わざるを得ない。

ディケンズは「昔の無知と貧困をいつも吹聴している」バウンダビーを「卑下自慢の威張り屋 (the Bully of

humility)」(HT, 1: 4)として嘲罵している。同じように卑下を自己防衛の戦略として使うヒープの小声とは違い、バウンダビーの過去の虚構を支えているのは、その「真鍮製のメガホンのような大声」である。実際に、奥様の浮気で青菜に塩のバウンダビーは、同情的なスパーク夫人に元気を出してと言われ、雷のごとき蛮声で「従業員の小魚どもを怒鳴り」(2: 11)つけ、元気なところを見せ付けている。バウンダビーが現在の地位を輝かせるために自分の卑しさを大声で吹聴するのに対し、ヒープは将来の地位を確実にすべく自分の卑しさを小声で相手に告げる。共通するのは、どちらの場合も「卑下も自慢のうち」という点だ。「慇懃で謙虚だが、とても狡猾で、こそこそした」(BR, 35)態度のガッシュフォードがゴードン卿の信頼を得ながら彼を食い物にしたように、ヒープもまた同じ卑下の戦略でウィックフィールドを丸め込む。ウィックフィールドとその娘に対するヒープのイジメの特質は、声高なバウンダビーには見られない陰湿さにある。ヒープは最後にミコーバーによって犯罪を暴かれ、悔し紛れに「この弱者イジメが！」(DC, 52)と罵倒するが、彼の陰湿なイジメが朗々とした声の主によってピリオドを打たれた(挿絵参照)ところに、ディケンズの鮮やかな手込みを感じずにはおれない。

ボールドウィック大尉は、狩猟パ



ーティーで冷たいパンチを飲みすぎたピクウィック氏が自分の地所で眠り込んでいるのを見て、「あんな奴に威張らせてたまるか！」(PP, 19)と叫び、彼を手押し車で獣の囲い場に運ばせて恥をかかせている。彼のように威張り散らす人間は自分が同じことをされるのを極端に嫌うようだ。ブランウンロー氏の反論を威嚇と思ひ、「治安判事を脅すとは何て生意気な！」(OT, 11)と怒ったファンク判事殿の場合も同断である。無商旅人は街にあふれる無法者について「弱い者イジメの背後に臆病者が潜んでいる」(UT, 30)と述べ、悪漢を野放しにしている治安判事を批判している。無商旅人の視点から見れば、街の無法者と大差ないアル中のファンク判事殿も酒で臆病神を追い払っているとしか思えない。なぜ、彼らは他人に威張り散らされることに対して、かくも敏感なのか。おそらく、食うか食われるかの弱肉強食・適者生存・自然淘汰の動物社会のように、人間社会もまた優勝劣敗の原理によって弱者が強者の餌食となる社会だということをも本能的に悟っているのだろ

う。これはもちろん社会ダーウィニズム的な世界観に対するディケンズの諷刺である。しかし、人間は動物であると同時に社会的な存在であるから、人間社会も弱肉強食型から共生型へ転換すべきだというヒューマニズムの精神は、勝組と負組とを分ける考えが依然として優勢な現代社会を見るに、ヴィクトリア朝当時からほとんど進化していない一どころか、むしろ退化している感がある。

セルフメイド・マンを諧謔化した名前を持つ「頑張り屋」ならぬ「威張り屋」のストライヴァーは、いつも「怒鳴って高飛車に出る」(TTC, 2: 5)男である。彼が法廷弁護士として前列に出て成功しているのは、同僚として実質的な仕事を引き受けて後列で彼を支えるカートンの存在があるからだ。カートン (Carton) には「標的の白星」という意味がある。それは標的の中心点である黒星 (bull's eye) を囲む白星であり、ストライヴァーを守ってやる彼の立場を適切に示すネーミングだと言える。ストライヴァーは、民衆のために財産も地位も捨ててしまったのに革命の先頭に立とうとしないダネイの臆病さについて、指をパチンと鳴らしながら非難している。しかし、彼のような張子の虎は(カートンが「山犬」であれば、むしろ眠った「獅子」と呼ぶべきか)、自分自身の臆病さを意識に受け入れることができないので、それを意識下に抑圧し、他者である

ダーネイに投影して非難するしかないのだ。虎の威を借りたキツネのような臆病者による弱者イジメには、不快や苦痛を伴う認識を投影の形で処理しようとする、いわゆる〈自我の防衛機制〉が働いているのである。

グリーンバー博士の寄宿学校における早期詰め込み教育と同じイジメを自宅を受けているグラッドグラインド家の子供たちが、“that famous cow with the crumpled horn who tossed the dog who worried the cat who killed the rat who ate the malt” (*HT*, 1: 3) というイジメの報いを歌った童謡、「ジャックの建てた家」を知らないのは皮肉である。「牛が角で犬を投げ上げる」と言えば、囲いの中で雄牛に猛犬をけしかけて噛みつかせる残酷な見世物としての牛イジメ（挿絵参照）が思い浮かぶ。牛イジメ (bullbaiting) は中世時代に貴賤上下の別なく流行し、ヘンリー八世の頃に始まった熊イジメ (bearbaiting) とともに、残虐さゆえにピューリタンたちの反対を何度か受けたが、結局は1835年の「動物虐待法案 (Cruelty to Animals Act)」まで人気を博していた。ちなみに、サ



イクスが虐待している犬の名前、ブルザイ (Bull's-eye) は上で述べたように黒色の「標的の中心点」という意味であるが、もともとは牛イジメで客が「雄牛の目」にお金 — 通例は、この動物の目とほぼ同じ大きさの1クラウン銀貨 — を賭けたことに由来している。<sup>8</sup>

牛イジメや熊イジメに使われる猛



犬よりも恐ろしいのがクウィルプである。彼は猛犬そのものへのイジメを楽しんでいる（挿絵参照）。この小さな男は短い鎖につながれた大きな猛犬に対し、「俺様に噛みつかねえのか？ ずたずたに引き裂かねえのか？ この臆病者め！（中略）貴様は怖がってるんだ、この威張り屋め！ 怖いんだ、それが分かってるんだ、貴様は！」 (*OCS*, 21) と笑いながら叫んでいる。笑っている時のクウィルプは「あえいでいる犬」(3) にたとえられているが、ここでは彼の臆病な性格についての暗示を読み取る必要がある。<sup>9</sup> どんなに短くても、鎖のおかげでクウィルプと猛犬との間には距離

という安全網が設けられる。しかし、この鎖が切れた瞬間に、猛犬を臆病者と呼んだクウィルプ自身が臆病者に反転することは、どんな読者でも容易に想像できるはずである。

娯楽としての牛イジメや熊イジメは、観客が自分の臆病さを意識せずに済むように、自己と猛犬を同一視して楽しむ集団的なイジメである。ここで問題となるのは、集団的なイジメの対象が猛獣ではなく、人間（特に、いたいけな子供）の場合だ。集団でオリヴァーを追跡する際の「泥棒！（Stop thief!）」という叫びには魔法にも似た力がある。この声を聞いた街中の商売人は商売道具を、子供はオモチャを放り出し、「みんな疾走しながら喚き、絶叫し、角を曲がる時には歩行者を突き倒し、犬を吠え立たせ、鶏を驚かせ、その音を街路に、広場に、路地に響き渡らせる」（挿絵参照）。ディケンズは「人間の心の奥底には何かを追いかけていたいという激しい感情が根づいている」（OT, 10）と言い、狩猟民族の流れを汲むアングロ・サクソン人の特質を道破して



いる。群集によるオリヴァーの追跡と「泥棒！」という叫びは、害獣退治や野外スポーツという美名で正当化されるキツネ狩りと「出たぞー！（View-halloo!）」という叫びを読者に想起させるはずだ。ここでは、キツネ狩りという紳士階級の集団による弱い者イジメが、その舞台を労働者階級へ移すことで、同じような本能的衝動に後押しされ、「泥棒！」という追跡の快楽を伴うサディスティックな娯楽へと変換されているのである。

#### 4 恐喝と脅迫

イジメが相手の公表できない秘密や弱みを握って脅迫するところまで進むと、それは法的に処罰される恐喝 (blackmail) となる。ゴミの山をつついて老ハーモンの遺書を見つけたウェッグはボフィンに恐喝するが、「弱い者イジメをする弁護士」（OMF, 4: 3）のような彼の恐喝は臆病さに支えられた虚勢にすぎない。実際、ウェッグはヴィーナスの寝返りによって形勢が不利になると、途端に「脅すような態度に尻込みするような態度が見え始める」（4: 14）。従って、雇ってもらった恩を忘れ、主人の目をかすめて悪事を働いたドブネズミが、法律に照らして投獄される代わりに、汚い「ゴミ集めの馬車 (scavenger's cart)」に投げ込まれたことは、この臆病な弱い者イジメにふさわしい処

罰だと言えよう。

厳格な父から堅苦しい教育を受けたクレナム夫人は自己の抑圧を美德として強調しているが、実際には父の抑圧を移譲してアーサーにカルヴィニズムの情け容赦ない教育を授けたように、その美德は偽善的な彼女が自己正当化のために行なった悪徳の言い換えに他ならない。<sup>10</sup> フランスの悪党リゴーはクレナム夫人の偽善と悪徳を見抜いており、彼女の遺言補足書に関する秘密を握って彼女を恐喝する。似非紳士のリゴーは、女性に慇懃なふりをしながら、実は恐喝というイジメを通して女性への支配力の行使を楽しむ男である。そんなリゴーをアーサーは「弱い者イジメの臆病者」(*LD*, 2:28)と呼び捨てているが、臆病な父から引っ込み思案な性格を受け継いだ彼が、今まさに窮地に陥っている義理の母を恐喝から救うことができない、その腑甲斐なさの方がむしろ問題であるように思える。リゴーの恐喝はクレナム夫人の家の崩壊によって中途半端なままで終止符を打たれるが、これはむしろアーサーの（特に女性に関する問題で顕著になる）消極的な姿勢を目立たせるだけである。

デドロック家の顧問弁護士タルキングホーンの住所が、ディケンズの盟友で法廷弁護士の資格もあったフォースターと同じリンカーンズ・イン・フィールズ（58番地）であったことは、つとに知られている。ディ

ケンズがフォースターの様々な助言に感謝していたことは事実だが、余計な助言にむかついたことは何度もあったはずだ。フォースターはディケンズの妻とも仲がよかった。その親密さが原因で二人の間には相当な口論があったし、マクフリーディなどは二人の友情が壊れるのではないかと恐れたほどである。<sup>11</sup> 自己満足と尊大さを代名詞とするポドスナップは、彼と同じ名前を持つフォースターがモデルだと言われているが、山崎勉氏が指摘したように、<sup>12</sup> タルキングホーンもまたディケンズのフォースターに対するイジメのために創造された人物として捉えることができる。タルキングホーンは『荒涼館』の校正段階でトーキングホーン (*Talkinghorn*) に間違えられたが、この弁護士にディケンズは「口うるさい拡声器」のような（または、それに類した否定的な）イメージを持たせ、心の中でフォースターに意趣返しをしていたに相違ない。しかしながら、タルキングホーンは「職業上の相談を受けた時以外は決して話をしない」(*BH*, 2) 沈黙の弁護士である。彼がレディー・デドロックの秘密を突き止めてから開始する謎めいた脅迫は、多弁で能なしのウェッグや饒舌を弄するリゴーと違って寡黙を特徴としているので、そこには底知れない薄気味悪さがある。タルキングホーンの脅迫理由については甲論乙駁しているが、デドロック家の

家名を汚さないという動機は別にして、第一にリゴーやジャガーズへとつながる支配欲，第二にジャスパールへとつながる追跡の快楽が，有力な動機として考えられる。ただし，タルキングホーンは勘定高さが原因でオルタンスに殺害され，その恐喝もリゴーの場合のように未遂で終わってしまう。タルキングホーンが早々に自業自得の罰を受けたために，脅迫の真の動機は特定できなくなってしまった。だが，この特定不可能性は，読者の説得力ある多様な創造的解釈を誘発するかぎり，むしろ歓迎すべきことなのかも知れない。

目による催眠術と囁き声とでローザを呪縛したジャスパールは，邪悪な脅迫の表情を浮かべて狂気じみた愛を告白する際に，「私はあなたを死ぬまで追跡する」(MED, 19)と最後に言っている(挿絵参照)。この脅迫を伴うセクハラ発言は，恐怖におびえる少女ネルに執念深く付きまとうクウィルプのように，追跡によって加虐的な興奮を高めたいというジャスパールの邪悪な欲望の発露に他ならない。しかし，この欲望は現実世界のこと

であり，幻想の世界では逆の傾向を呈示する。ローザの愛を求めているジャスパールにとって，愛とは被虐的な依存の合理化にすぎない。彼は彼女の面影を腕に抱いて幻想の世界に突入し，絞殺強盗団が死と破壊の女神(Kali)を崇拝するように，ローザなる神に隷属することで激しい興奮を伴う被虐性の快楽を享受しているのだ。エドウィンと一緒に散歩するローザをジャスパールがストーカーよろしく密かに追跡した(13)あと，即座にロンドンへ阿片吸飲に行った理由は，まさにそこにあるのだ。

\* \* \* \* \*

適者生存と自然淘汰こそ進歩であり，弱肉強食こそ自然の摂理であるという考えは，ヴィクトリア朝の繁栄を支えた中産階級の指導原理であった。ラマルクやダーウィンの進化論によってキリスト教が弱体化していた社会の中で，ディケンズは権力と金力に執着する強者による弱者イジメを様々な作品で執拗に描いている。その主たる目的が何であるかを解く鍵は，秘書ロクスミスを解雇する際に，ポフィンが彼の身分の低さと貧しさを理由にイジメのふりをする場面(OMF, 3: 15)にある。それは，ポフィンが弱者イジメを演じることでベラの同情心を呼び起こし，金よりは愛に価値を置くべきことを彼女に悟らせる場面(挿絵参照)





である。ディケンズは社会に蔓延する弱者イジメを活写することによって、強者の非人間的な悪行を指弾すると同時に、読者の涙（特に満都の子女の紅涙）を絞ることで、ベラと同じような反応を求めていたはずである。どのディケンズの作品においても、弱者イジメをした強者は最後に多かれ少なかれ因果応報の罰を受ける。勸善懲悪のエンディングに拘泥するディケンズは批判されることも多いが、そのような批判は差し控えるべきではなかろうか。強者が環境の激変によって常に滅びてきたこと、そして抑圧に慣れている弱者が激変した環境の中でもたくましく生き抜いてきたことは、過去の歴史が証明しているからである。

## 注

- 1 丸山真男「超国家主義の論理と心理」『現代政治の思想と行動（新装版）』（1964；未来社，2006）25。
- 2 伊村元道『英国パブリック・スクー  
ル物語』（丸善ライブラリー，1993）71-72。
- 3 Louis Cazamian, *The Social Novel in England 1830-1850*, trans. Martin Fido (London: Routledge, 1973) 211.
- 4 社会の抑圧と想像力の問題については、拙論「ディケンズと芸術 — 社会の抑圧とそのイメージ」『名古屋大学言語文化研究叢書』（第1号，2002）103-22を参照のこと。
- 5 田辺洋子訳『ニコラス・ニクルビー（上）』（こびあん書房，2001）52。
- 6 Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (Amsterdam: North-Holland, 1974) 498.
- 7 ディケンズの作品における臆病者の弱者イジメには、ほとんどの場合「なぐるか、ひるむか」の両方が内面化されており、サディズムとマゾヒズムの共存が見られる。例えば、プラスはクウィルプがキットへの復讐として古い船首像を鉄棒で打ち据えている姿を見て、この船首像はクウィルプに似ているので家庭用の肖像として買い求められたのだろうかと思う（OCS, 62）。この場面（挿絵参照）ディケンズがサディズムの権化に見えるクウィルプの自虐的なイジメの嗜好を暗示していることは間違いない。
- 8 井上義昌編『英米故事伝説辞典（増補版）』（富山房，1980）108。
- 9 この場面をグレイは役割が逆転した

牛イジメや熊イジメのグロテスクなパロディー版として捉えている。Beryle Gray, “Man and Dog: Text and Illustration in *The Old Curiosity Shop*,” *Dickensian* 103.2 (Summer 2007): 127–28.

- 10 ヴィクトリア朝小説における抑圧の問題を分析したキューシッチは、社会的権威を得る戦略として抑圧を受けているように見せかける悪

党の系譜にクレナム夫人を位置づけている。John Kucich, *Repression in Victorian Fiction* (Berkeley: U of California P, 1987) 255.

- 11 Paul Schlicke, *Oxford Reader's Companion to Dickens* (Oxford: Oxford UP, 1999) 246.
- 12 山崎勉『ディケンズのこころ』（英宝社, 2003）185.



“Is it like Kit—is it his picture, his image, his very self?” cried the dwarf, aiming a shower of blows at the insensible countenance, and covering it with deep dimples.